

外傷体験時の解離について

村上 靖彦

1. 心的外傷時の解離と現象学的エポケー

「あるレイプ後生存者はこの切り離された状態をこう記している。すなわち「私はその時点で私の身体を離れた。私はベッドの側に移って、起こっていることを見つめた。(・・・)私は孤立無援感から解離した。私は私の側に立っており、ベッドにいるのはただの抜け殻であった。平板な感覚だけがあった。私はただそこにいた。私が部屋の中を絵に描きなおしたときにはベッドから見た絵を描いたのではない。私はベッドの横から描いたのである。私が見つめていたところからの構図である。」第二次大戦の戦闘参加帰還兵も似た体験を述べている。すなわち「第4中隊の大部分のように、私も感覚がしびれていた。本当の解離状態であった。この状態に(・・・)我々は‘二千光年の眺め’という名をつけていた。それは麻酔をかけられたような無感覚な見つめ方で、自分のことなどどうでもよくなった男が大きく目を見開いたままでいるのであった。私はまだその状態にはなっていなかったが、麻痺は全面的なものであった。本当は私は戦闘の場にいたわけではなかったのかと思わせるような感じだった。」(Herman 1992, trans., 62-63、訳を変更した)

「[娘を強姦殺人で失った] A 子さんの場合には、遺体解剖が行われたときは本人はほとんど何も感じる事ができない状態であったように思われます。感情も麻痺し、外で起こっていることもよくわかっていない状態にあったようです。葬式の時も、これが本人だろうかと思ふような状態ですから、当然、悲しいというような気持ちはできません。これも、殺人事件の多くの遺族が、葬式の時には涙も全然でなかった、悲しいとも何とも思わなかった、という風に話しています。あまりにショックなことがあると、人は感情を失ってしまいます。」(Konishi 2001, 12)

心的外傷はさしあたって、「体験する」ことそのものできないような苦痛と定義できる。そこでは耐え難い心理的肉体的苦痛を避けるために主体は外傷体験から解離して(変成意識のような)解離状態のなかに逃げ込む。これからの記述でわかるように、通常の体験に内在する構造(受動的・能動的総合の持つ秩序・調和)がこわされるために、体験という呼称すら不適切である。引用は外傷体験時の解離状態の典型的な記述をなしている。被害者は外傷体験から病的な距離を取って、もはや苦痛を感じないのである。被害者は外傷体験をあたかも他者が苦痛を被っているかのように観察したり、場合によっては、幽体離脱のように「外から」自らを眺めることすらある。ここではエポケーと似た事態が起こっている。解離は、ある種現実感(存在定立)のかっこ入れをとまなう「体験」(苦痛)の無関心な観察である。つまり超越論的

ではなくて事実的に現実化されてしまったかっこ入れなのである。以下両者の相違を整理する。

1) フッサールとフィンクの議論によれば、現象学的エポケーにおいては無関心な傍観者が生起する¹。この傍観者は「内側」から構成的自我と世界の構成を観察するが構成に自ら介入することはない。これに対し外傷体験時の変成意識においては、解離が徹底しているために傍観者はもはや「内側」から観察するのではなく、謎めいた仕方だが「外から」観察するのである。たしかに解離の傍観者は「空間内」に場を持つのであるが、かといってこれは定位できる客観的位置ではないし、自然科学を特徴づけるような抽象的客観(神の視点)でもない。しかし苦痛を体験しない(つまり離人感を持っている)以上、そして外部から眺めることすらある以上、自分の生きる身体 *Leib* から分離した視点である。しかし生きる身体を持たない心(この場合は解離した傍観者)というのは何だろうか。幽霊のような私とでも言えるのか。まさにこの点において解離と現象学的エポケーの違いが生じる。現象学遂行的傍観者は生きる身体から分離はしない。そしてまさにそれゆえに体験流(と構成的自我の作動)を「内側から」観察・記述することができるのであり、これが自然的態度から超越論的な態度への還元の一つの重要な点である。現象学的傍観者は現象の生起それ自身に立ち合うのである。しかし解離した傍観者の生きる身体への関係はさらに不可思議である。生きる身体から解離してはいてもひとつの視点である限り、それはあいまいかもしれないけれども具体的な何らかの身体性に受肉しているはずである。

2) 外傷体験のさなかには、被害者はあたかもその「体験」が現実ではないかのように感じる。それゆえ定立あるいは現実感の病的なかっこ入れのようなものが起きている。世界と身体が事実的に存在定立・現実性を失うのである(精神医学では、現実感喪失と離人感と呼ぶ)。これは現象学遂行的傍観者が、自然的自我が持つ知覚対象に対する信を遮断するのと一見似ているが、実際は全く異なる。現象学的なエポケーにおいては何もかも失われない。言い換えると、確かに存在への信は宙づりにされるが、体験が持つ現実感あるいは生命感そのものはいささかも損なわれない。現象を対象化することで実体化あるいは化石化するという、客観的視点の避けられない錯覚や現象の生成それ自身を隠す所与性への信を遮断することで、むしろエポケーは体験の(おそらく受動的総合レベルの生動性 *Lebendigkeit* に由来する)生命感そのものを露わにする。逆に、外傷的体験においては、体験の現実性あるいは生命感といったものそのものが失われる。エポケーとは異なり、解離は現象の生命感(外傷の場合はおそらく受け止めきれない過剰な生動性)をシャットダウンする仕組みなのである。まとめると、現象学的なかっこ入れにおいては、世界は客観的な存在として与えられることをやめて超越論的主観性における生成する現象として現象するが、心的外傷においては生成がシャットダウンされることで、世界は現実の世界と

1 「普遍的なエポケーのなかで、全ての信の定立をかっこ入れするなかで、現象学的な傍観者はおのずから生起する。」(Fink 1989, 43)

して現れることをやめて幻のようになるのである。

3) 外傷体験の傍観者は行為や試練から、つまりは行為する自我や動き感じる身体から切り離される。このように解離した傍観者はそれゆえ完全に「無為」になる。「受動的」という代わりに「無為」というのはフッサールの受動的総合と異なるからである。ここでの無為とは、能動的志向性・総合がマヒするというを意味している。現象学的傍観者は現象学的エポケーと還元を遂行する限り(Fink 1988, 43)、たとえ自身は世界を構成しないとしても、そして世界に関心を持たないとしても(Hua VIII, S.98sq.)、やはり能動的である。しかし外傷の傍観者はそうではない。上の引用からもわかるように、なされるがままに超然と眺めるだけなのである。

しかし無為になっているのは傍観者だけではなくて、構成的自我の媒体あるいは場である生きる身体自身も(現象学的エポケーの遂行の場合とは逆に)、構成における創造性を失う。外傷体験時には習慣化あるいはむしろ自動化されて創造性を失った行為が盲目的・自動的に作動するのみである。自分で何をやっているかの自覚もないまま日々のルーチンをこなしたり²、あるいは兵士であれば戦闘をつづけることがある。それゆえ外傷体験における離人症状と現実感喪失は、現実感が抑止される(解離)だけではなくて、構成的自我の創造性も失われるという点で二重である。構成的自我の基体である生きる身体は外傷体験を体験することもなく、しかしビデオカメラのように記録するだけとなっている。自動化された習慣的行為の反復が外傷体験時やそのあとに生起するだけでなく、外傷体験そのものがフラッシュバックや悪夢、そして虐待場面を再現する子どもの強迫的な遊びなどで自動的に(能動的な意識の関わりなく)繰り返される。

まとめると、1. 現象学的傍観者が生きる身体の「内側」に視点を取るのに対し、病的解離は生きる身体の「外」に視点を取る。2. 現象学的なエポケーは自然的態度では背景に退いている体験の生動性を露呈させるが、病的解離は外傷体験の過剰な生動性をシャットダウンする。3. 現象学的傍観者は定立に対して無関心であるが現象学遂行という能動性は確保するのに対し、解離した傍観者はあらゆる能動性を剥奪されて無為になる。

2. 傷ついた身体

現象学的還元における方法的な自我分裂においては構成的自我の生動性や創造的

² テアはクライアントの健忘されていた解離体験を再構成して以下のように述べている。
「ごく普通の午後、学校から帰った少女は、優しいが酔いがまわっている母と台所にいた。母のガウンの袖にとつぜん火がついた。たちまちガウンも揃いのネグリジェも、そして母も炎に包まれた。テーブルに向かっていたパトリアは恐怖にすくみ、世界で一番愛する人が焼死するのを見ていた。それから子どもはふらふらとバスルームに入っていった。お湯を満たし、服を籠に入れ、お風呂に入って、そのまま別世界の奇妙なネバーランドに漂っていった。本人はどれくらいの高さだったのか覚えていない。煙のにおいに気づいたアパートの誰かが消防署に連絡し、消防士がドアを破って入ってきた」(Terr 1994, trans., 130)。

作動が確保されるのに対して、外傷体験においては傍観者が無為になるとともに構成的自我も創造性を失う。創造性の剥奪は能動的志向性の固定化だけでなく、それより下層の受動性に傷が付いたゆえに生じる帰結である。健忘や受動的なフラッシュバックという事態が含まれているのは、体験となり得ない、意識に上り得ない苦痛、受動性レベルで受けた傷があるということである。意識に登らないから健忘されるが、同時に消化されないまま受動性にとどまり続けるから症状として回帰する。現象学の用語で言うと、受動的な次元での過剰な触発が能動志向性の対向に回収されて高次の意味へと再編・消化されることがないのである。外傷の核は体験化し得ない現象(受動的総合の最下層に残った傷)であり、図式化(体験化、意味産出)のプロセスにのらない³。もし感覚や運動感覚が体験化されず統合もされていなければ、苦痛の感覚は対象知覚のヒュレーとならずに漂うことになる。受動的総合と能動的総合および両者の調和の場である生きる身体が作動しないことになる。能動的志向性のマヒとしての無為は、実は受動的総合の破綻あるいは受動的総合の生成運動にすら取り込まれないような現象と相関しているのである。能動性の剥奪としての無為は受動性レベルの苦痛に対して「為すべがない」ということを意味している。

ところで心身の苦痛や悲嘆を感じるができないということが問題になっている以上、ここでの受動的総合や能動的総合とは、単に感覚的印象の形象化と統握のことではなく、感覚にくわえて情動性⁴と運動感覚とが相互浸透しつつ図式化⁵する運動である。図式化においては、一方で(言語分節以前かつ体験化以前の)情動性、感覚、運動感覚と文化的伝統が浸透しあいつつ分節し、一つの動的な形象を生み出し体験可能なものとなる(この動的な形象は表情、身振り、作品、感情、思考などという形を取る)。知覚や身振りには、情動性や運動感覚が図式化されつつ表現されているのでありここで感情が成立するのである。この体験可能なものへの転換は次元の転換である。図式化は諸領域間の浸透と相互分節であり、次元転換はそれに伴って生じる非連続的な高次化である。被害者は情動性や緊張から解離されるので適切な身振りができないのである。1)自己意識によって体験されないので、受動的総合以前の外傷的触発というネガティブな受動性が、「思い出せない」という欠損として露

³ 自己意識成立以前の外傷において身体が被る状態についてウィニコットは次のようにまとめている。「1.未統合状態への回帰、(・・・)2.落ち続けること(・・・)、3.心身共同の喪失、〔身体に〕住まうことの失敗、(・・・)、4.現実感の喪失、(・・・)、5.対象〔他者〕と関係する能力の喪失、(・・・)」(Winnicott 1989, 89-90, trans., 114 訳を変更した)

⁴ 本論では、情動性 *affectivité* は、分節以前体験化以前の触発性 *affectivité* であり、それが図式化のなかで分節され体験化する(高次化する)と「感情」となると定義する。「情動」とは、図式化されないままに固まった病的情動性である。

⁵ カントの図式論は感性とは無縁の悟性・概念が構想力を介して感性的形象に現出することを指していた。ここで使う図式化という運動は、それを拡大して使用するものである。悟性という「見えないもの」の直観化だけでなく、(目には見えない)生きる身体 *Leib* の作動の次元が、直観的な次元と交差する現象を指すのに使う。運動感覚や情動性が、知覚や空想の次元と浸透し合うとき、知覚や空想そのものも形象化するとともに、その際運動感覚や情動性(そしてもちろん理念性も)も体験された運動や感情として分節するという、相互浸透と分節・形象化の働きである。ピアジェ的な、固定した身体運動のパターンのことではない。

わになるのである。2)ここで生じた受動的総合による形象化以前の受苦は、図式化と次元転換を通して変容も消化もされない。そしてこの受苦自身も普通の情動性のような可塑性・流動性は持たない。分解されない残留農薬のような情動として、ある種の受動的連合によって動機づけられてフラッシュバックの核を形成する。これが傷ついた身体の内実である。3)受苦はそれゆえ受動的・能動的総合の可能性を失ったために、固定しかつ無秩序な体験化しえない情動的緊張の塊である。おそらく精神分析で無意識と名付けられたもの(の核)が、いま問題になっている体験に回収しえない情動の塊なのであろう。

受苦はさらに、情動のかたまりであるだけでなく、しばしば解体した運動感覚断片の沈殿でもある。被害者は外傷体験時のみならず、フラッシュバックや悪夢のなかで落下を体験する⁶。外傷体験における落下の感覚は運動感覚のうちの一つではなく、運動感覚の統合の解体を示している。運動感覚の統合の解体、ゼロ点と方向性(特に上下感覚)の喪失を意味する。実際、多くの被害者は必ずしも実際に落下を経験したわけではないにも関わらず、落下の悪夢を見る。このことは悪夢において回帰しているものが、支え(身体を統合し支える図式として働く運動感覚の受動的総合)を失った生きる身体の解体(Winnicott)であることを示している。生きる身体が生きる身体であるためには、そこに受肉してまとめあげる図式化(つまりゼロ点、方向性、運動感覚間の調和、知覚的射映の総合的運動)が必要である。被害者はその外傷体験のなかで受けた受動的総合の次元での傷ゆえに図式化を失い、この生きる身体の図式化の喪失を反復する。それは言語以前の対人関係のなかで生成するものであり、まさに心的外傷が対人関係の枠組みを破壊するがゆえに、身体の図式も壊れるのである。外傷を受けた人は対人関係の枠組みへの信頼感そのものに傷を受けるなかで、この間身体的に創設される身体の統合(図式化)を失うのである(補足参照)。

3. 解離と原意識

冒頭で解離を理解するために、現象学的傍観者と構成的自我の区別と対照させてきた。しかしこの区別はもっと根源的な区別へと送り返されることになる。というのは、心的外傷で侵されるのは、この方法的反省自身がよってたつ構造だからである。つまり現象学における方法的な自我分裂と心的外傷の病的解離双方の基盤であるような超越論的な構造がここで問題になってくる。反省一般の可能性の条件としての、体験一般に随伴する自己知・自己言及性、フッサールの言葉で言うと原意識へと送り返されるのである。本節の主題は、自我分裂・解離が原意識の変成に由来することを示し、その変成の発生を記述することである。

原意識は、能動のおよび受動的作用に内在する自己指示的な作用、つまり現象が体

⁶ 「高いところからすとーんと落ちる夢を頻繁に見るようにもなりました。以前はそんなもの見たこともなかったんですが。そういう夢を見るともちろんはっと目が覚めます。」(Haruki, M., 1997, 519-520) 主に地下鉄サリン事件の被害者へのインタビューで構成された村上春樹の『アンダーグラウンド』の中には、落下についての夢の記載がいくつかある(Haruki, M., 1997, 165, 301, 519-520, 658, 681)。

験化する作用だと見なすことができる。全ての能動的志向的行為は自己意識を伴っている。私が何かをしているということを私は常に感じている。受動的な現象も体験化されているかぎり、意志的な反省は働かないにもかかわらず、(自我以前の匿名的な)再帰性・自己指示性を持っている。運動感覚や情動性、そしてそれらのリズムや強度などは、それが体験されているならば、つまり背景的にであれ意識に登っているのならば、自己感・原意識が成立している。体験の生成がすなわち自己意識なのであり、別にはたから眺める必要はない。二次的な自己意識である反省以外の場面でそのようなことは起きない。ある統一的な現象として自己を体験するとは、図式化と次元転換の運動が生起するという極めて動的な機制であり、仮に自己というものを実体であるかのように取り出したとしても、それは散逸構造のような運動の影であり、自己とは本来は傍観者ではなく上述の運動そのもののことである。

外傷において体験を統合する図式化が欠損しているという経験的事実と外傷において自己意識が解離へと変質するという事実が連動しているということは、自己意識が単なる体験に再帰的に随伴する自己指示の機能ではなく体験の図式化の機能そのものであるということの間接的に証明している。

外傷被害者の解離においてはこのような原意識が変質する。もはや患者が被っているはずの苦痛を感じず、まるで他人が苦しんでいるかのようにすら思うが、これは体験と自己意識の区別があまりにも明瞭で、自己意識が他人の体験を眺めているかごとくなるからである。言い換えると原意識によって保証されるべき自己感が生じないのであり、代わりにある種の離人感が生じるのである。このことは外傷性の健忘の一部を説明してくれる。外傷に自己意識が随伴しないなら自己の体験としては生きられることがないから、その人はそれを普通の意味で記憶して再想起することはできなくなるからである。健康な体験においては傍観者というものが二次的な反省の産物に過ぎないとすると、解離において生じる傍観者は何に由来するのだろうか。

解離とは、図式化する働きが情動性(そして身体的外傷の場合は運動感覚や痛覚)に受肉することができなくなってしまった状態であり、残された要素(感覚的印象)だけが他の次元と浸透せずに単独で形象化して体験されている状態(現実感のない知覚)である。知覚には情動性や運動感覚が浸透していないがゆえに自己感が失われると結論することができる。解離の傍観者は知覚成分だけが正常なのに運動感覚や情動性に由来する自己感が失われたことから来る疎隔感なのであると言える。これが健康な人の反省的意識に似るのは、反省が図式化を生きるのではなく主題化・客観化することで、情動性を生きることを断念する(距離を取る)ことが、解離における情動との離断と類比するからであろう。外傷体験で時に報告される幽体離脱に関しては、私たち人間が本来もっているグローバルな自己身体像(見えない部分の様子も了解している)が、外傷体験において運動感覚が解離されて中心化を失ったためにかえって顕在化しているものと考えられる。つまり潜在的な身体感覚(フッサールがときに **Phantom** と呼んだもの)が知覚に局限されず、運動感覚のゼロ点にも局限されていないという現象学的事実を示唆している。『ヒステリー研究』(Freud&Breuer 1893-1895)でのフロイトが外傷の治療法として呈示し、現在の臨床にいたるまで受

け継がれている徐反応というメカニズムは、外傷時に不可能だった(解離された)未分化の情動性や感覚へとアクセスし直し、これをフラッシュバックのイメージ(感覚的所与)とあわせて図式化し直す作業であり、図式化のなかで情動性が分節され他の領域と浸透することで、そしてとりわけ対人関係へと開かれることで、情動の持つ緊張が解放されてゆく作業である。

補足：解離の起源としての間主観性構造の破壊

以下の記述は純粋な現象学に則ったものではない。心理学の知見から、類推できる現象学的な人間学である。

解離の構造的な基盤が、間主観性構造そのものの破壊であるという間接的な証拠がいくつかある。1)一つは治療論的なもので、たとえばハーマンは、心的外傷の本質を対人関係の「離断」に求めている。身体的にどれだけ大きな被害を受けたかどうかと言うよりも、他者のサポートを受けられたかどうかということの方が、外傷の度合いを左右するというのである(Herman 1992, trans., 87)。他方で治療の初めの段階を安全と安心感の回復および最後の段階を他者に対する信頼可能性の回復に求めている(ibid., trans., 241)。いずれの場合も問題になっているのは、他者に対する基本的な信頼を破壊、確保、回復するという点である。心的外傷そのものの基盤に情動的な対人関係の構造が横たわっているのである。2)次に、被害者はフラッシュバックに伴う不安・恐怖とは別に、慢性的あるいは周期的な不快不安感・抑うつに苦しむことが多いように思われる(少なくともそういう主張をする被害者は一定数いる)。この不安感、しばしば見捨てられ感を伴い、あるいは安心感の欠如を伴う。見捨てられ感が、他者との関係の欠損を示していることは言うまでもないが、安心感が間身体的な発生構造を持つ情動性であるということについては別の場所で論じた(拙論「自閉症者のシェルターと安心感の起源としての間身体性」Murakami 2004b)。比較的軽微な事件事故で解離を伴う重い外傷体験を被る被害者は、そもそも土台としての間主観性構造の破壊に伴う体験様式の変質をあらかじめ抱えているのではないだろうか(Dolto 1984, 39)。様式の変質が深い抑うつ感(他の情動性の図式化の排除)として現象している。実はフロイトが原光景として捉えたのは、両親の性交の場面などではなく、このような原トラウマ(間主観性構造の破壊)だったのではないだろうか。それが後年なんらかの出来事を神経症を引き起こす外傷的な出来事として位置づける構造的基盤を用意したのではないか。つまりある種の解離現象の背景にはこのような原トラウマと二次トラウマという構造が隠れているのではないだろうか⁷。そうすると健忘あるいは解離も二段階の層を持つことになる。つまり最近のトラウマに伴う解離、それを準備する構造としての過去における間主観的構造の破壊とその健忘である(後者はネグレクトがそうであるようにしばしば特定の出来事と結びつくこともなく生起するだけになおさら想起しにくい)。人間学ではなく現象学の視点

⁷ メラニー・クラインの原光景と分裂・妄想態勢に関する議論をこの視点から読み直すことができる(Klein 1932, ch.1,2)。

から内部観測で考察した場合は、そのつどの図式化の背後でそれを支える間主観性構造の安定が見いだせると類推できる。おそらくは感情表現・思考・遊びが前提とする安心感の分析がこの主題に到達するはずである。3)一人であることに対する強度の不安に関しては、ネグレクトなどを背景に持つと考えられる境界性人格障害にもしばしば見られる。4)そもそもネグレクトや心理的虐待が虐待として成立しうるということは、身体的な暴力ではなく情動的な対人関係の構造の欠損が外傷をもたらすことを端的に示している。

以上の経験的な知見は、解離そのものも情動的な対人関係の破壊と関係を持つということを示している。さらに踏み込んでみると、原的な自己感である原意識は現象の体験化の運動であり、ということは(非感性的現象が感性的次元と浸透することで、分節しつつ体験化される)図式化そのものである。図式化は対人関係のなかで成立するがゆえに、対人関係の枠組みの破壊が原意識を破壊するのであると考えることもできる。この点に関しては発達心理学の知見を現象学的に分析するなかで間接的な証明をすることができる(Murakami 2004b)。つまり、原意識の母胎は、幼児期の保護者との関係のなかでの保護者が行う幼児の身体の「図式化」(運動感覚の統合、皮膚感覚の統合、情動の分節と表現)であり、原意識とはこの間身体的な図式化の運動を内面化したものなのである。

本稿は文部科学省科学研究費補助金(若手 B)による研究成果の一部である。

参考文献(初版と異なる版を使用している場合に末尾に出版年を記した。)

-F. Dolto 1984, *L'image inconsciente du corps*, Paris, Seuil 1984, coll. Points, 1992

-E. Fink 1988, VI. Cartesianische Meditationen Teil 1. Die Idee einer transzendentalen Methodenlehre, Dordrecht/Boston/London, Kluwer Academic

-S. Freud und J. Breuer 1893, «Über den psychischen Mechanismus hysterischer Phänomene» (1893) in *Studien über Hysterie (1895)*, Frankfurt am Main, Fischer Bücherei, 2000 (「ヒステリー現象の心的機制について」、『フロイト著作集7』、懸田克躬、小此木啓吾訳、人文書院、1974)

-J.L. Herman 1992, *Trauma and Recovery*, New York, Basic Books, 1992, revised ed., 1997 (ハーマン、『心的外傷と回復』、中井久夫訳、みすず書房、1999)

-E. Husserl (LU II/1), *Logische Untersuchungen*, II/1, Tübingen, M. Niemeyer, 1913 (1993)

-E. Husserl, *Erste Philosophie (1923-4) Zweiter Teil : Theorie der Phänomenologischen Reduktion*, Husserliana Band VIII, La Haye, M. Nijhoff, 1959

-E. Husserl (HuaXI), *Analysen zur passiven Synthesis*, Husserliana Band XI, Den Haag, M. Nijhoff, 1966 (フッサール、『受動的総合の分析』、山口一郎・田村京子訳、国文社、1997)

- E. Husserl (HuaXV), *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität III* (1929-1935), *Husserliana XV*, La Haye, M. Nijhoff, 1973
- M. Klein 1932, *The Psycho-Analysis of Children (1932) (The Writings of Melanie Klein vol. II)*, New York, The Free Press, 1984 (『児童の精神分析—メラニー・クライン著作集2』、衣笠隆幸訳、誠信書房、1997)
- T. Konishi 2001, 小西聖子、『トラウマの心理学 心の傷と向き合う方法』、NHK出版
- Haruki M., 1997, 村上春樹、『アンダーグラウンド』、講談社、1997、講談社文庫、1999
- Y. Murakami 2004b, 村上靖彦、「自閉症者のシェルターと安心感の起源としての間身体性」、『国際関係研究』、日本大学、第25巻第1号
- L. Terr 1994, *Unchained Memories – True Stories of Traumatic Memories, Lost and Found*, New York, Basic Books (テア『記憶を消す子供たち』、吉田利子訳、草思社、1995)
- B. van der Kolk, A. C. MacFarlane, L. Wisaeth (1996), *Traumatic Stress : The Effects of Overwhelming Experience on Minde, Body, and Society*, Guilford Press, 1996 (コーク、マクファーレン、ウェイゼス、『トラウマティック・ストレス PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて』、西沢哲監訳、誠信書房、2001)
- D.W. Winnicott 1965, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, Madison, International Universities Press, 1965 (1994)
- D.W. Winnicott 1971, *Playing and Reality*, London, Routledge, 1971 (1991) (ウィニコット、『遊ぶことと現実』、橋本雅雄訳、岩崎学術出版社)
- D.W. Winnicott 1972, *Holding and Interpretation*, New York, Grove Press, 1972 (1986)
- D.W. Winnicott 1989, *Psychoanalytic Explorations*, Cambridge, Harvard University Press (ウィニコット、『精神分析的探求』第1巻、館直彦他訳、岩崎学術出版社、2001)